

SHOW HEYシネマルーム

★★★

完全なる飼育 秘密の地下室

配給/アートポート

2003 (平成15) 年9月5日鑑賞

Data

監督：水谷俊之

原作：松田美智子

出演：山本太郎/しらたひさこ/加藤治子/竹中直人

👁️👁️ みどころ

タイトルだけ見ればポルノ映画のようだが、れっきとしたシリーズものの第4作。現実の女子高生誘拐監禁事件を題材とした松田美智子の原作は、監禁した中年オジサンが示すやさしさによって、監禁された女子高生との間に親密感や愛情さえ湧いてくるというストーリー。まさに『完全なる飼育』というタイトルがピッタリ。R-15指定だが、エッチ度は低いので、その方面はあまり期待せず、ストーリーの面白さ(?)を味わう方がいいだろう。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<ちょっとエッチなタイトルだが・・・>

ポルノ映画と間違えような看板やチラシ、そして『完全なる飼育 秘密の地下室』という思わせぶりのタイトルを見れば、中年のオジサンなら大体かなりエッチな映画だと期待(?)してしまう。しかし主役の女の子の名前は知らないものの、山本太郎(『バトル・ロワイアル』(2000年)、『夜を賭けて』(2002年)、『ゲロッパ!』(2003年)など)で有名、加藤治子、竹中直人というビックネームを見れば、R-15の指定はされていてもポルノ映画でないことは分かる。「一体どんな映画なんだ?」。そんな複雑な思いで、金曜日の夜、オールナイトでやっているマイナー映画館へ一人で自転車をこいで観に行ったら、午後9時25分からの上映だ。観客は私を含めてオッサン3人のみ。何ともうらぶれた、わびしい世界・・・。

<刺激的な冒頭シーンだが・・・>

映画の冒頭シーンは、女子高生らしき可愛い女の子がどしゃぶりの雨の中、恋人から「金

のつくれないような女はいらない！」とボロクソに言われ、容赦なく殴られ、蹴られ、泥まみれにさせられながら、それでも「私を棄てないで・・・」と恋人にすがっていくというもの。いやはやかなり刺激的・・・と思っていたら、その後の展開は意外と静かでスロウ。結構イライラしながら次の展開を待つという感じだ。

<松田美智子の原作とその映画は大ヒット>

現実に新潟でおこった「新潟少女誘拐監禁事件」をもとに、亡松田優作の元妻松田美智子が生きた原作『女子高生誘拐飼育事件』（1997年）を映画化した『完全なる飼育』は、1999年劇場公開された。

現実起こった事件は、誘拐、監禁状態でのセックスの強要等の凶悪な犯罪だが、この事件をベースに松田美智子が描いた原作と映画は、外観は同じでもその実態は全く異なるものだ。すなわち、第1作で主演した竹中直人演ずる中年のオジサンは、あくまで「心と体が結ばれた完全なるセックス」を求めて女子高生を誘拐・監禁したものだ（そんな勝手な理屈があるか！という反論はごもっともだが、それはこの際横において・・・）。だから、彼は決して彼女に嫌なことを強要・強制することなく、彼女にやさしく接し続けていた。だから、当初は恐怖を感じていた彼女も、少しずつその恐怖心が薄らいでいき、そればかりか次第に中年のオジサンに対して親密感や愛情さえ抱くようになっていった。したがって、誘拐監禁事件の公開捜査の結果、遂に彼女が保護され、竹中オジサンが逮捕され、裁判になった時、彼女は、「あれは誘拐監禁ではなく、楽しい同棲生活だった」と証言するのだった。

<シリーズもの第4作がこれ>

こんな意外性のあるストーリーの面白さによって『完全なる飼育』は大きな反響を呼んだ。そのため、これがシリーズ化され、第2作は『完全なる飼育 愛の40日』（2001年）として、さらに第3作は『完全なる飼育 香港情夜』（2002年）として公開された。私が今回観た『完全なる飼育 秘密の地下室』はその第4作にあたるものだ。

独特のキャラクターをもつ俳優竹中直人は、第1作では面白いパーソナリティーの中年オジサンになって主演したが、第2作目以降は、主役は別の個性的（？）な男性に譲り、自分はチョイ役だけで顔を出している。これは竹中直人というキャラクターは、『完全なる飼育』シリーズでは、なくてはならないものと認識されているからだ。

<同じような映画は外国にもあったぞ・・・>

変態（つばい）男が美しい女性を誘拐、監禁し、調教する・・・というストーリーは何となく淫靡で、刺激的。最後には、女性は救い出されるという結末になる（？）と分かっているけど、その誘拐、監禁の動機にはそれぞれ意味があるし、監禁生活の中では犯人の人

物像が赤裸々に表現される。だからその多くは興味深い作品となる。外国で有名な映画は『コレクター』（1965年）。サッカーの賭で大金を得た若い銀行員は、仕事を辞めて郊外の家へ一人住み、蝶のコレクション。やがて蝶のコレクションだけでは満足できなくなった彼は、美しい女子学生にクロロフォルムを嗅がせて誘拐し地下室に監禁。この作品は大ヒットし、男優、女優共にカンヌ映画祭で演技賞を獲得した。

1965年の公開当時、私はまだ高校生だから、私が映画館で観たのはリバイバル上映のもの。結構刺激的で、面白かったことをよく覚えている。

また、1997年に公開された同名の映画『コレクター』は、女子学生8人が失踪し、3人が死体で発見されるというもの。科学捜査専門の刑事にモーガン・フリーマンが扮して犯人探しに活躍し、9人目の被害者の女医にアシュレイ・ジャッドが扮するサイコスリラーで、これも面白かった。このように誘拐、監禁モノ(?)は、異常な心理を持つ犯人を描くものだから、心理描写の巧拙でその作品の評価が分かれることになる。そして異常と正常は紙一重・・・。あなたにもひょっとしたら同じような欲望があるのかも・・・?

<一切セリフのない山本太郎の演技>

この映画が静かでゆっくりとした進行になるのも道理。今回女子高生を監禁するタケル（山本太郎）は、過去のショック（トラウマ）によって口がきけなくなっているという設定だからだ。そこで彼はやむなく小型パソコンに文字を表示することによって彼女に意思を伝えようとするのだが、2人は何せ、監禁者と被監禁者という関係だから、パソコンへの表示だけではなかなか意思疎通と状況把握ができず、彼女はどうしてもイライラしてしまう。もっとも役者がセリフを一切しゃべらないで演技するのは大変。多分山本太郎本人が一番イライラしていたことだろう。

<話は結構ややこしいよ・・・>

彼女が監禁されていたのは屋根裏部屋。だから、この映画のサブタイトルとなっている「秘密の地下室」は、物語の前半には全く登場しない。したがって、なぜそんなサブタイトルがついているのか全く分からないままだ。そして、「秘密の地下室」の話が出てくるまでの、口のきけないタケルと監禁されてイライラしている梨里とのやりとりはいろんなストーリーがあって結構長く、ちょっと疲れてくる。また、加藤治子演ずるタケルの保護者三杉隆子との関係もなかなか分からず、イライラしてしまう。

そして地下室の登場。ここには〇〇のストーリーが・・・。しかしこれはもちろん内緒。

原作の『完全なる飼育』の基本ストーリーをいかしたうえで、口のきけない主人公と禁断の地下室という状況設定をしたわけだが、ちょっとひねりすぎの感じがある。第3作の「香港バージョン」などの方が分かりやすいのでは・・・とつい思ってしまった。

2003（平成15）年9月6日記